

注連縄にみる伝承形態の調査研究 (VI)

— 中部・東海地方 —

A Study of Traditional Form “Shimenawa” (VI)

— In Chubu and Tokai Area —

佐藤 武郎 河野 公記

Takerō Satō Masanori Kawano

Abstract

The final goal of this report is to make a study of “Shimenawa” which is the traditional form and is handed down to the people in Gifu prefecture, Aichi prefecture, Nagano prefecture and Shizuoka prefecture.

In this report “Shimenawa” was made an investigation and was made an analysis from the point of view of design studies. Samples were collected in these prefectures from 1983 to 1985.

The classification system made use of the classification system which was based on folklore.

In these prefectures the aspectual beauty of “Shimenawa” is various. This point is similar to the characteristic of other areas. In Aichi prefecture and Gifu prefecture major forms of “Shimenawa” are Wajime and Gobōjime. In Nagano prefecture it is Gobōjime. In Shizuoka prefecture it is Wajime.

まえがき

今回は中部地方（岐阜県・愛知県・長野県）東海地方（静岡県）の民間に伝承されている注連縄をまとめたものである。

調査収集の関係から、第1次調査では尾張、美濃、信濃地方に出向した。第2次調査では静岡県、遠江、駿河、伊豆地方を調査した。しかし、岐阜県の飛騨地方ならびに長野県北部、松本から長野市にかけては、第3次調査として、第1次調査で収集したスライドをもとに、高山市観光課、長野県では長野市立博物館の協力で形態の比較、傾向を把握することができた。

以下、本文で詳細を提示するが、愛知県、岐阜県の主流をなす注連縄の形態は、輪ジメ、牛蒡ジメの2種である。長野県では主流をなす形態は牛蒡ジメである。静岡県は総じて、輪ジメ

が主流であった。

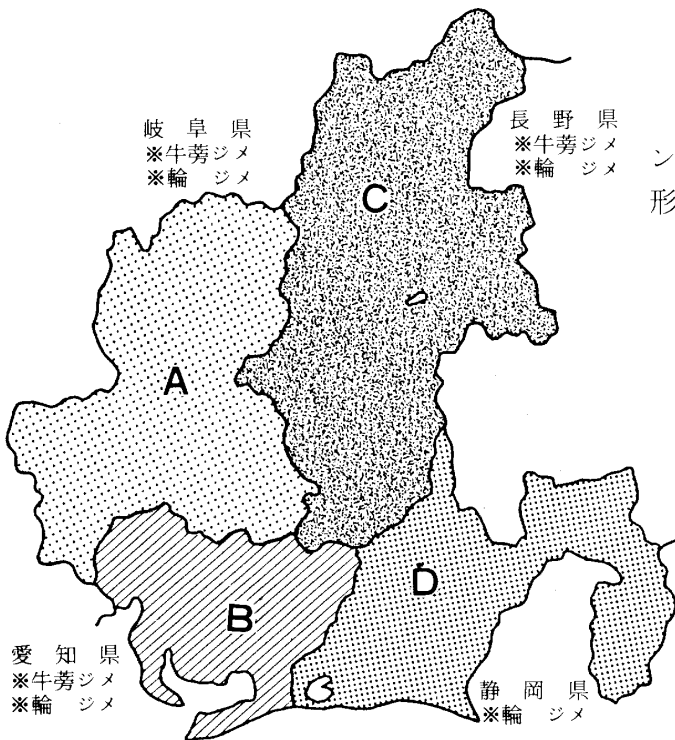


Fig 1 中部地方東海地方の注連縄伝承形態分布図

I 研究目的

正月の「シメ飾り」＝「注連縄」をデザインの見地より調査分析して、注連縄のもつ造形的様相美の再見を目的とする。

II 調査研究の手続

- 1 中部地方(岐阜県・愛知県・長野県)東海地方(静岡県)において一般家庭で飾る注連縄。
- 2 1983年～1985年(各12月26日～12月31日まで)
- 3 収集の手続
中部地方・東海地方に出向して収集を行った。(一部委託収集したものあり)
- 4 写真による形態の記録
- 5 注連縄の付属物(飾り)を除去した基本体(礎形)の構造分析。

III 考察と結果

愛知県、岐阜県、長野県では、大別してその形態は2種(牛蒡シメ・輪シメ)が伝承されている。牛蒡シメの形態は、これまでに多くのバリエーションをみて来たわけで、特別めずらしい形態ではない。しかし、長野市の牛蒡シメの用法は全国的にみてめずらしい飾り方である。牛蒡シメは通常ヨコにして飾るものであるが、この地方では松の小枝をシメと束ねてFig 10-aのようにタテにして、玄関の左右に対で飾るという。このような飾り方は他に類をみない。

一方、輪シメの注連縄は、九州地方の輪シメとは大きく異り、輪の部分は上部で、一重、あるいは二重、三重にまとめられており、このシメの輪に対して、シデの部分が全体の $\frac{2}{3}$ の割合で構成されているものが多く、一見して長形のフォルムである。さらに、飾りに使われる御幣は紅白のものが多く、シメ飾りとしては正月気分を演出する派手なものが目立った。この傾向は静岡県のシメ飾にも同様の様式がみられた。

以下、各県別にその形態を考察して行くことにするが、挿図※印は各地域の代表的(主流をなす)形態とみてよい。本研究で使用する形態分類用語は民俗学で用いられている「牛蒡シメ」「板シメ」「輪シメ」「一文字シメ」4種を基本用語としている。

1 岐阜県 Fig 1 - A (牛蒡シメ・輪シメ)

Fig 2 - aは岐阜県岐阜市で収集した輪シメである。飾りは扇面、海老、松竹梅、裏白、熨斗、御幣、だいたい、海老と木炭は赤白の水引で結ばれている。サイズはヨコ26cmタテ58cmである。形態はFig 2 - bのように、まず中央上部に三重輪のシメを配置して、そのシメの絢尻を最上部

に扇形板状に構成している。シデは3条で下部にかなりボリュームをもたせているため、扇面、輪ジメ、シデの三つの要素がみごとに調和した美しい形態である。

Fig 3 - a は岐阜県飛騨高山市の注連縄である。飾りは、だいたい、裏白、木炭、御幣、である。Fig 3 - b でわかるように、シメの輪は三重である。絢尻の部分がこの注連縄では、蝶結びでまとめられている。岐阜市のものと比較すると、構成要素はほぼ同じであるが、シデのさげ方が、図のように輪ジメの外輪下部に力強くシメ込まれていて、製作が手なれた完成度の高い構成をみることができる。特にこの注連縄はタテ83cmもあり、シデは53cm全体の約 $\frac{2}{3}$ の比例である。制作地同市手島町、12月15日を過ぎると朝市で売られている。

Fig 4 - a は岐阜県関ヶ原町で収集したものである。飾りは、だいたい、海老、造花の讓葉で木炭をくるむ、裏白、御幣である。輪は三重であるが、Fig 4 - b のようにシメの絢尻が左上部にイチョウ返しにまとめている。シデを左右にまとめたため、全体のバランスが三角形に構成されためずらしい形である。Fig 5 は、岐阜県大垣市で収集したものであるが牛蒡ジメ。この形態は全国各地でみられる大根ジメの様式である。飾りは造花の松竹梅、海老、だいたい、御幣である。シデは3条である。この形態は他の地方でもたびたび収集している一般的なものである。

Fig 6 は岐阜県多治見市で収集したものである。愛知県の注連縄と類似しているので参照されたい。三重の輪ジメであるが、中央頭部と左右に螺旋状の細い縄が配置されているが意味不明である。シデのさげ方も本体とシデの中間が二本の縄で絢われており、このような取り付け方は他に例をみない。タテ70cmヨコ約25cmである。

Fig 7 - a は岐阜県関市で収集した。飾りが非常に多く、だいたい、裏白、木炭、海老、干柿、御幣、熨斗、熨斗は左右の複輪にも付けられている。タテ約75cmヨコ約37cmである。Fig 7 - b のように三重輪ジメであり、本体と同じ形態のシメの小型のものを左右に配置したバランスの良い構成である。また側輪部のシデは稲穂付で堂々たる風格である。

2 愛知県 Fig 1 - B (牛蒡ジメ・輪ジメ)

愛知県名古屋市では街角でシメ飾りの露天売りがみられた。これは大都会の特徴である。都市部では当然農家がないわけであるから、農村のある周辺市町村のいずれかが注連縄の製作地となる。名古屋中心部で収集したFig 8 は岡崎市で制作されたという。愛知県では輪ジメ、Fig 9 のような大根ジメの二種とみてよい。

Fig 8 - a は三重の輪ジメであるが、外輪、この場合一番下になる太い部分と、次の輪の間隙がないために、三重のシメがコブ状に盛り上がった形態となるこの地方独特のフォルムである。飾りは割合少量で、だいたい、裏白、熨斗、紅白の水引でだいたいをくるみ、讓葉を最上部に結える。だいたいの下に白紙と金紙の熨斗を敷く。さらに中央部に稲穂を数条さげる。Fig 8 - b で基本形のプロポーションをみることができるが、輪の部分が全長(タテ75cm)約 $\frac{1}{3}$ の比、シデが非常に長く感じる。シデは3条である。岐阜県多治見のものと比較すると、シデの部分が少し異なるが形態的伝承はほぼ同じであり、多治見市が岐阜県の中で特異な伝承となれば、何らかの理由で(たとえば注連縄の商品流通が愛知県より)愛知県と同じ方向で形態伝承がなされて来たのであろうか。本研究が民俗学的に伝承追求までふれず、形態変化中心主義であるため、生産のなされ方、伝承径路の追求は不明である。

Fig 9 - a, b は牛蒡ジメ、海老、だいたい、裏白、御幣、左絢い左向、特に解説する必要もない



岐阜県 Fig 2 - a

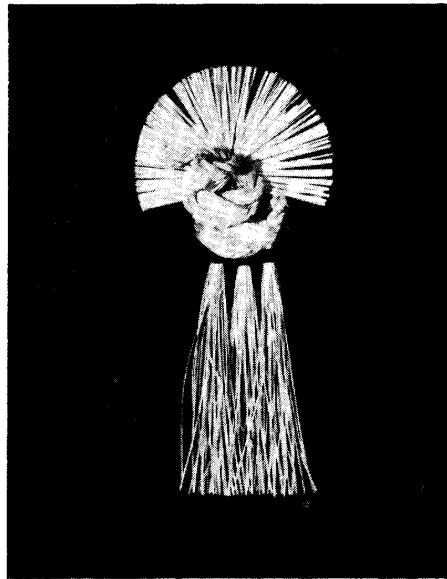
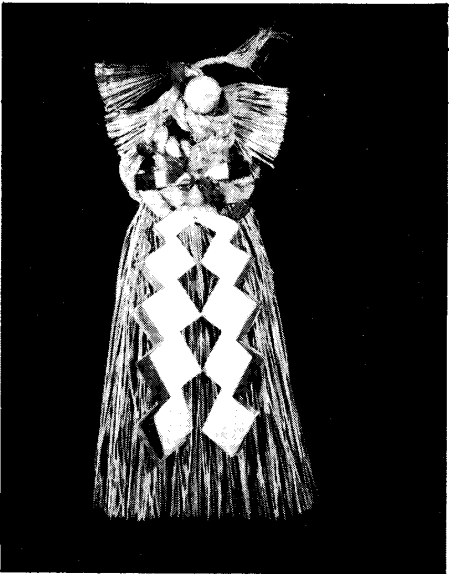


Fig 2 - b



岐阜県 Fig 3 - a

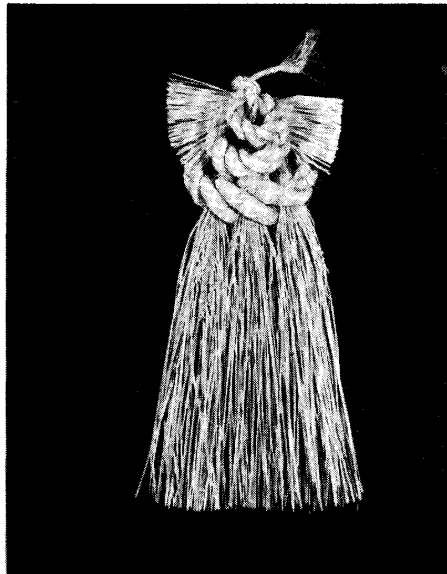
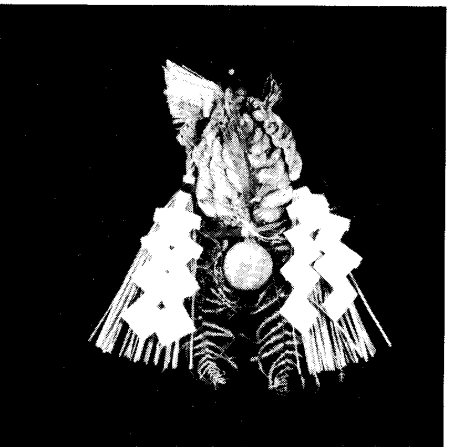


Fig 3 - b



岐阜県 Fig 4 - a

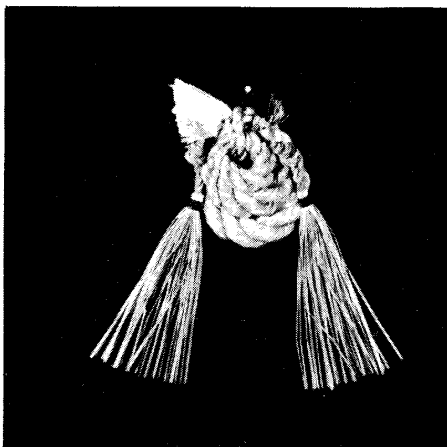
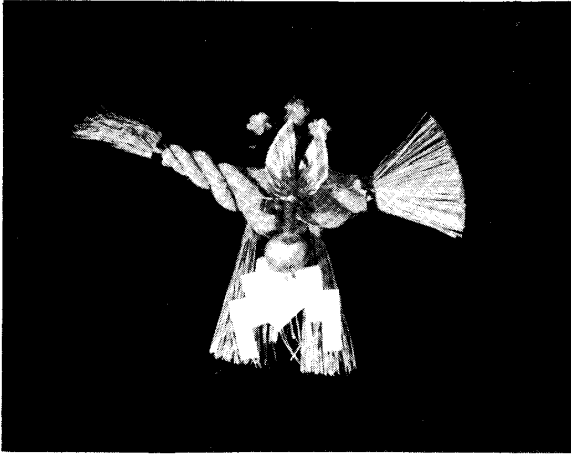


Fig 4 - b



岐阜県 Fig 5 - a



岐阜県 Fig 6

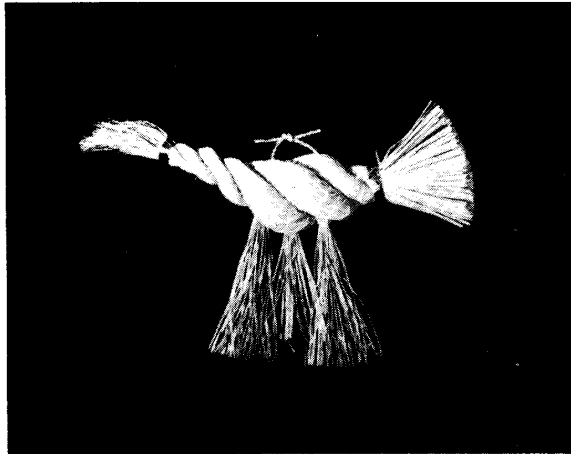
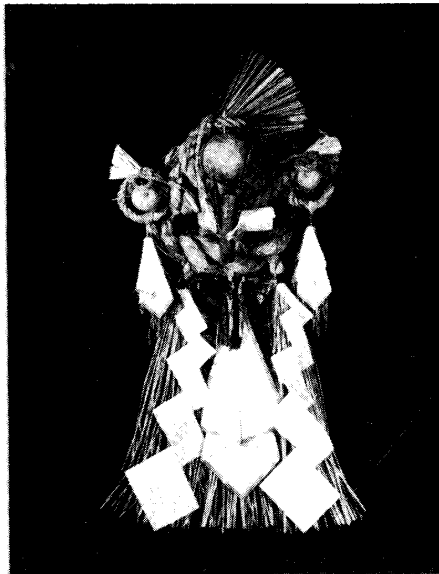


Fig 5 - b



岐阜県 Fig 7 - a

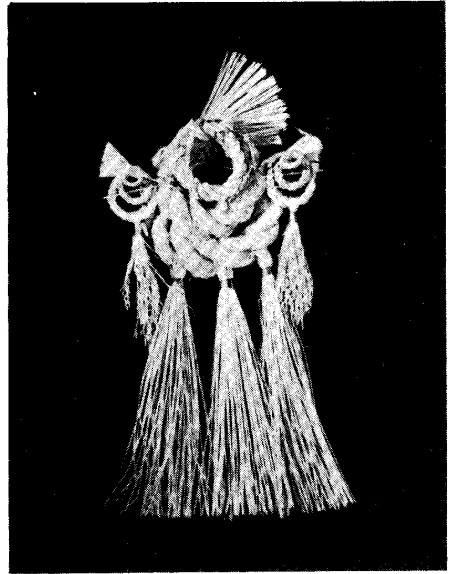
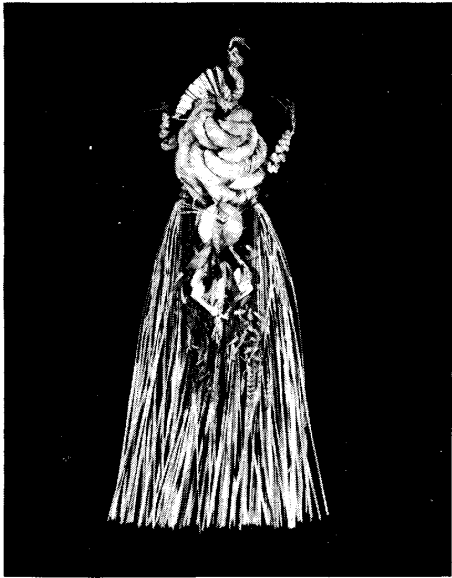


Fig 7 - b



※愛知県 Fig 8 - a

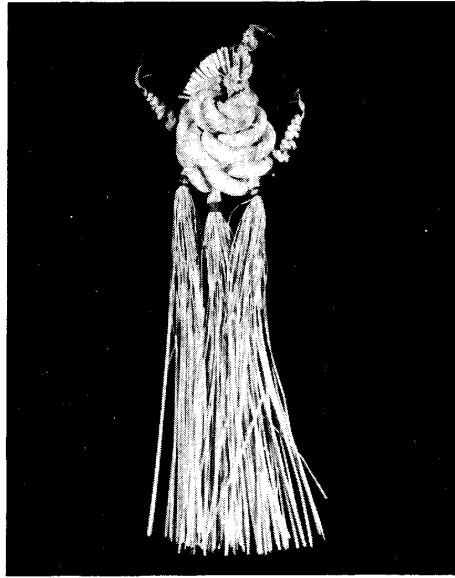
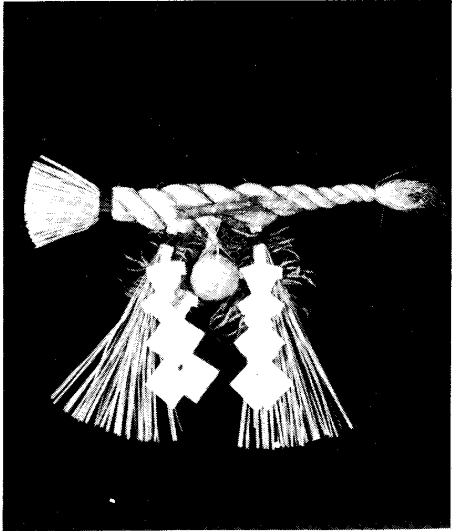


Fig 8 - b



愛知県 Fig 9 - a

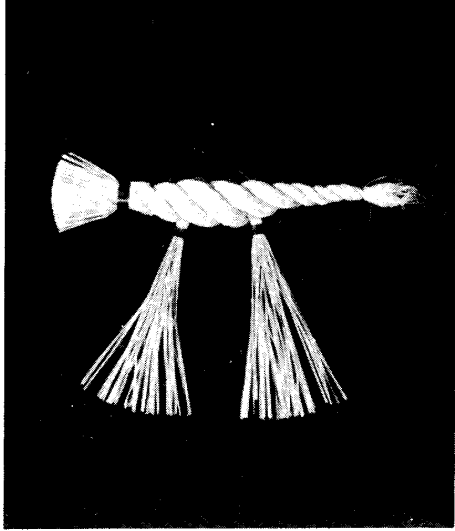
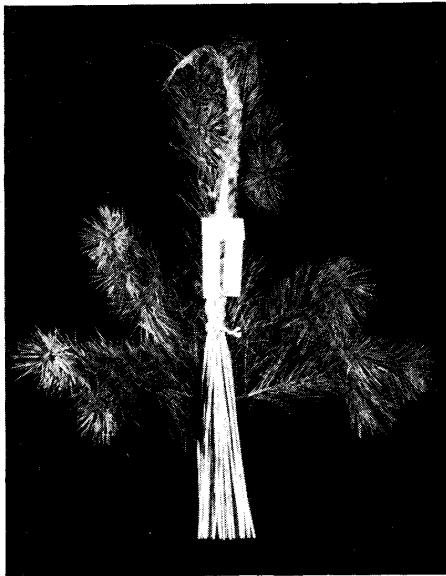


Fig 9 - b

注連縄にみる伝承形態の調査研究(VI)



※長野県 Fig 10-a

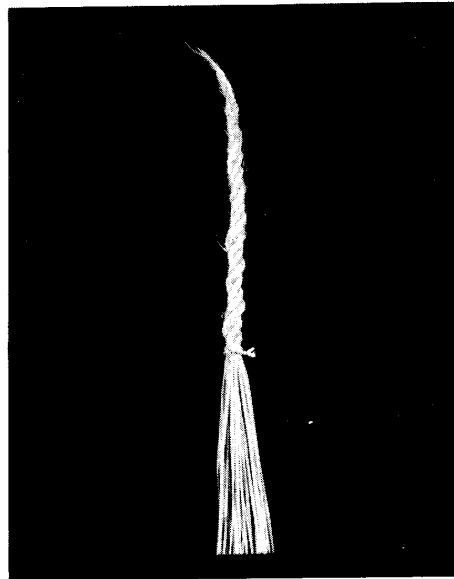
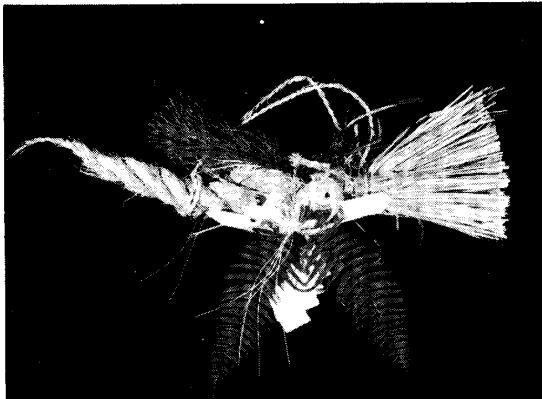


Fig 10-b



長野県 Fig 11-a

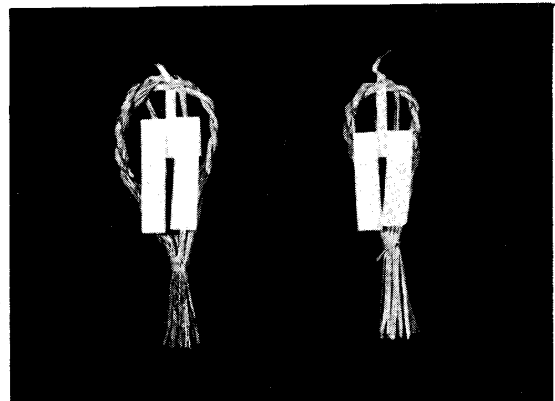


Fig 12

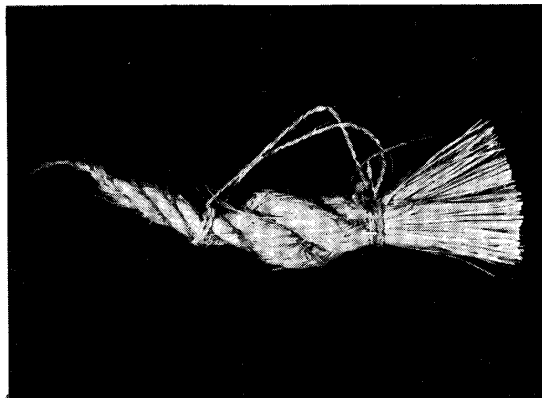


Fig 11-b

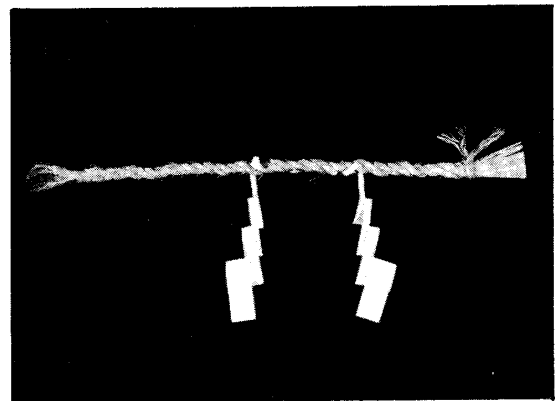


Fig 13

ような全国的に共通性の高いフォルムである。シデが2条である。愛知県は先に述べたように都会であるため、一般家庭でおしなべて、注連縄を正月に飾るという風習は失なわれる。しかし、伝統的正月行事をまったく喪失してしまうわけではなく、人工密度が高いわけであるから、伝承を受け入れる人達も多くいるわけで、様式的には輪ジメと牛蒡ジメを主流として伝承されている。

3 長野県 Fig 1-C (※牛蒡ジメ・輪ジメ・その他)

長野県は列島最中心部に位置している。4本の大山脈に囲まれた広大な山岳地帯にあり、諏訪を中心に北部県庁所在地長野市があり、南部中央線沿って木曾山脈系由で古い街道宿場町がある。このような地理的条件が複雑な地方は調査収集が困難であり、形態の把握に特別な手続が必要となった。幸運にも文化県の長野市で民俗資料を保存する長野市立博物館があり、北部地方の注連縄の形態把握がなされた。このような立派な文化施設を各県が保有していれば、目的に応じて、比較研究がスムーズに行うことが出来るのではなかろうか。以下、長野市博物館の資料と現地収集の注連縄を加えて、形態の様相をみて行くことにする。

Fig 10-a は長野市立博物館作製のものである。同館は伝承指導として、注連縄教室を開催している。形態は牛蒡ジメである。用法は Fig 10-a のように、松枝を添加して、中央に御幣を取り付ける。対にして門、玄関などの柱に飾る。Fig 10-b は形態的にはスタンダードなフォルムといえるが、タテに使用するところが非常にめずらしいといえる。Fig 11-a も牛蒡ジメであるが、この地方では「だいこくジメ」と呼び、細長い牛蒡ジメに対して、太く大きい大根が大黒天に縁起呼びされたものといわれ、店の入口の鴨居の上に下げるといふ。飾りは模造の鯛と熨斗を紅白の水引で結びつけている。裏白、御幣を下げる。Fig 11-b のように、シデが一条もない。これもめずらしい。但し、松本市内の造り酒屋の玄関先に、杉玉が飾られていて、この杉玉の正面に牛蒡ジメ（大根ジメ）が飾られていたが、こちらは、2条のシデがさげられていた。Fig 13 は形態分類上は一文字ジメであるが、長野市では「横ジメ」と呼び、神棚の前に通年飾る。Fig 12 は「しゃくしジメ」井戸端、勝手口、風呂場等の入口に飾る。Fig 14-a は輪ジメ、飾りは輪の中心部最下部に裏白を敷き、次に紅白の御幣、中央部に熨斗を真横に十文字に配置して、さらに中心最上部に横造大黒天の顔型ぬきを紅白の水引で結ぶ。飾り物の上部、輪ジメの交点に造花の松竹梅を配置している。

Fig 14-b で基本形、タテ約70cm輪の直径18~19cm、輪ジメとシデのプロポーション1対2。牛蒡ジメを輪にした交点よりシデを輪の中央部で3条に分け輪ジメ、底部の縄の間隙に縋い込み構造的造形美を示している。

飾り方は、商家の戸口に飾ったものが、最近では洋式のドアに飾るといふ。輪ジメの小型化したものを自動車に飾る。これは全国的傾向である。

以上をまとめると、牛蒡ジメ（タテ使用）は農家の玄関先。牛蒡ジメ（ヨコ使用）もあり、これも太くシメたものは店の入口に飾ったり、玄関先にも飾る。

輪ジメは商家で飾るといふ。さらに同館資料の中には、大黒ジメと呼ぶ、特注の径26長さ90cmという豪華なものもあり、商家・町家で伝承されて来た。

「宝船」といふ、帆掛ぶねに米俵をのせた民芸品風な飾りジメがあるが、これは床間に飾り、予祝的な意味で一年間の幸福を願うものと解説されているが一般的なものではない。

また、牛蒡ジメタテ形のもので、シメの部分が多くなったものを「アシツキ大黒」と呼ぶも

のがある。このように多種の形態で用法の意味づけが明確な地方はめずらしく、農耕民族の祈りのかたちが伝承されていることは注目すべきである。

長野県南部地方も形態は分類的にみて、牛蒡ジメ、輪ジメであるが、注連縄の制作地が異ると作者の造形感覚が多少変化する。

Fig15-aは同県諏訪市の輪ジメである。飾り物は、おたふく面をしめ込むように輪ジメの中に配置して、紅白の水引で結んでいる。そのお面の下部顎の部分に、造花で松竹梅、紅白の御幣、大判を飾る。いずれも縁起のよい語呂合わせと、繁盛を意味する派手な飾りである。

Fig15-bの基本形をみると、長野市Fig14-bと構成要素はまったく同じである。Fig15-bはシデが稲穂の現物であるというだけである。

Fig17-aも同じく諏訪市で収集した。飾りをみると、牛蒡ジメ中央最上部に、朱色に金文字で寿を入れた扇面、模造の鯛、裏白、松葉、だいたい、讓葉、紅白の3条の御幣、千社札で「家内安全」が飾られてきわめてカラー・フルである。

Fig17-bで注連縄の基本形が一見できるが、牛蒡ジメより下げるシデの分量がきわめて大量であり、シデの束が5条であるために長タテ形の台形で面をなしている。シデは注連縄では7・5・3の祝い数で縁起をかつぐが、土地が変わると偶数もある。又、板ジメの場合、7という数字であれば、当然平面的な形態となり、面構成でデザインされたものとなっている。しかし、諏訪市のものは、たしかにシデの分量から形態が面的であるが、牛蒡ジメの形がピンとはね上るほど固くシメられているため、シデが面的に取り扱かれているにもかかわらず牛蒡ジメとみる。タテ68cmヨコ牛蒡の長さ60cm、シデのヨコ巾36cmである。

Fig16-aは伊奈市で収集したものである。飾りは紅白の扇面に寿の金文字が入れている。模造鯛、中央におたふく面、右はしに造花の松竹梅、紅白の御幣を左右のシデに下げる。中央のシデに千社札で家内安全が貼られている。この注連縄も大変派手な飾りである。

Fig16-bの基本形でわかるように、牛蒡ジメの絢尻が諏訪市のものと逆に向いている。またシメの中央上部に3つの米俵を組み上げて、いかにも豊作を祈るフォルムを演出している。シデは3条であり、しっかりと牛蒡ジメの底部に取り付けられている。

Fig18-aは伊奈市の輪ジメである。飾りは紅白の扇面、模造鯛、おたふく、小判の下に稲穂下げる、紅白のシデ左右にさげる。タテ72cmヨコ巾約25cm~30cmである。

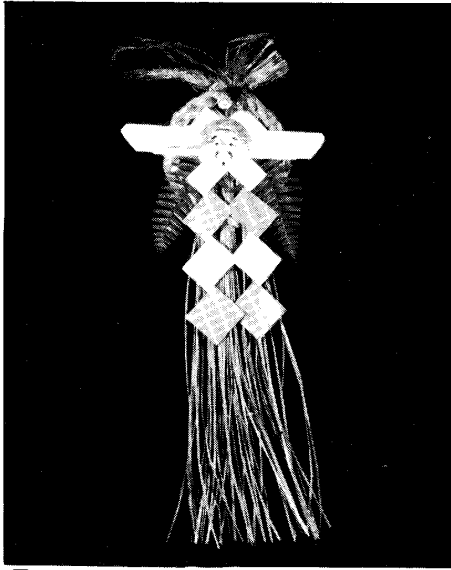
Fig18-bの基本形のように輪の注連縄が細めであり、輪の上部に絢尻を扇形に切りそろえてあり、その後部に穂先が火炎状に造形されている。さらに3条のシデは輪の上部交点より3条の分離した束として下げられている。

以上、長野県の注連縄9種を収集して、その形態的様相をみてきたが、基本的には、牛蒡ジメと輪ジメの2種であり、田園都市の集合からなる同県は伝承性が豊かであることが窺える。

4 静岡県 Fig 1-D (※輪ジメ)

静岡県は山間部に赤石山脈、富士山をひかえて、海岸部は遠州灘と駿河湾を望む東海道地方であり、古くから開けた土地柄であることはいうまでもない。したがって、西は浜松から東は伊豆、熱海までを調査の対象して、出来るだけ異種の形態を収集したかったが、結果はいずれも輪ジメであり、町家に九州地方のような軒なみに注連縄を飾るといった風習をみなかった。

Fig19-aは静岡県三島市で収集した注連縄である。飾りはだいたい、裏白、紅白の御幣、



長野県 Fig 14-a

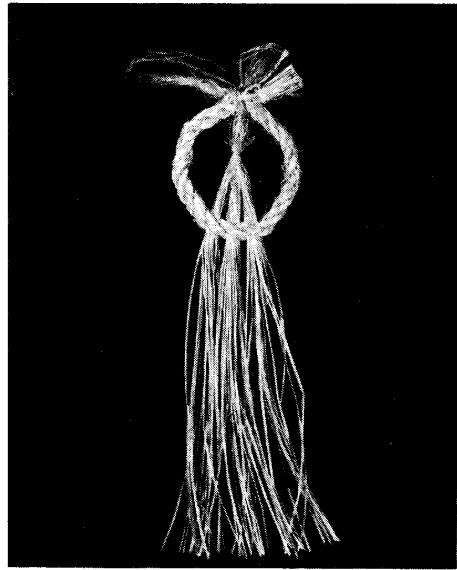
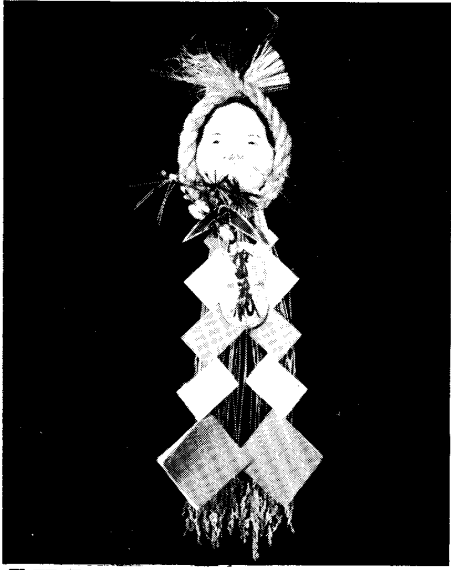


Fig 14-b



長野県 Fig 15-a

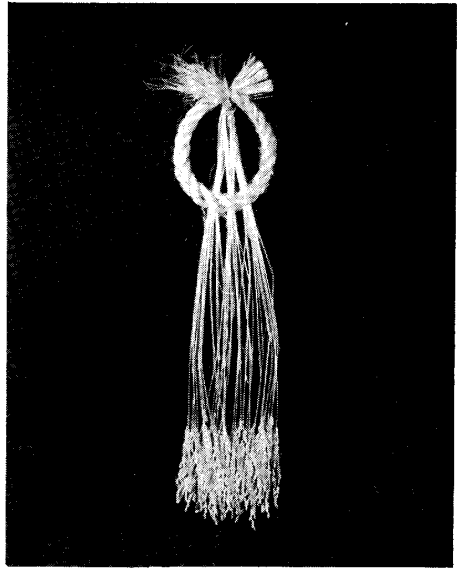


Fig 15-b



長野県 Fig 16-a



Fig 16-b



長野県 Fig 17-a

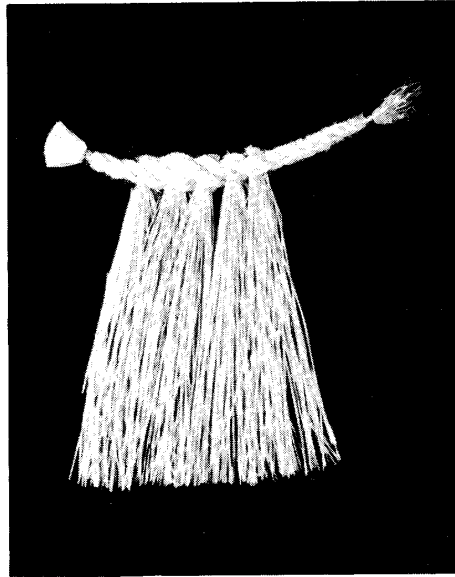


Fig 17-b



長野県 Fig 18-a

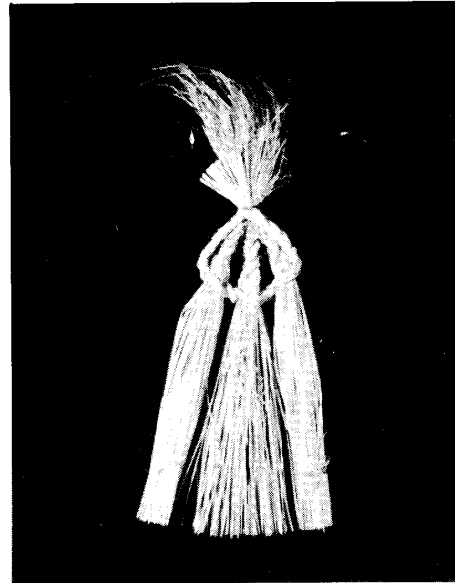
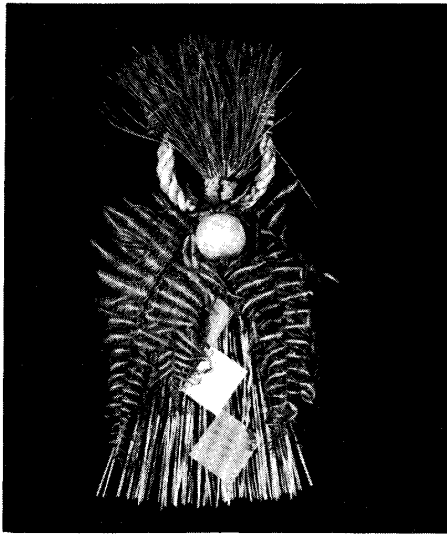


Fig 18-b



静岡県 Fig 19-a

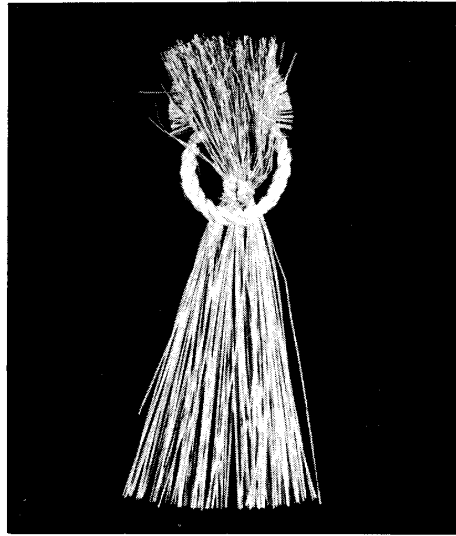
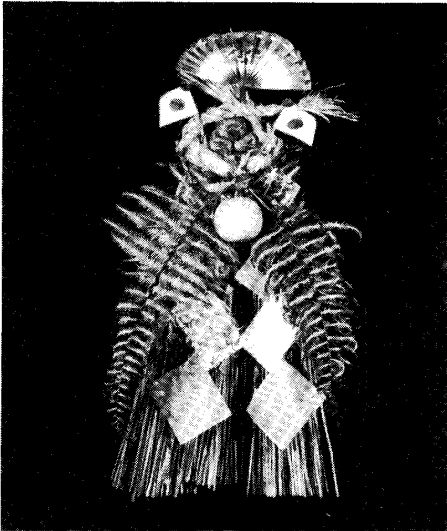


Fig 19-b



静岡県 Fig 20-a

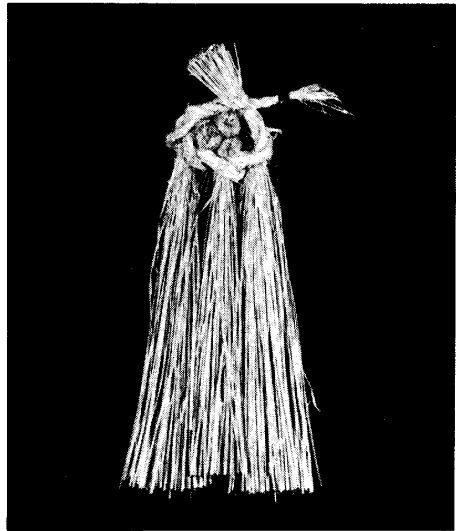


Fig 20-b



静岡県 Fig 21-a

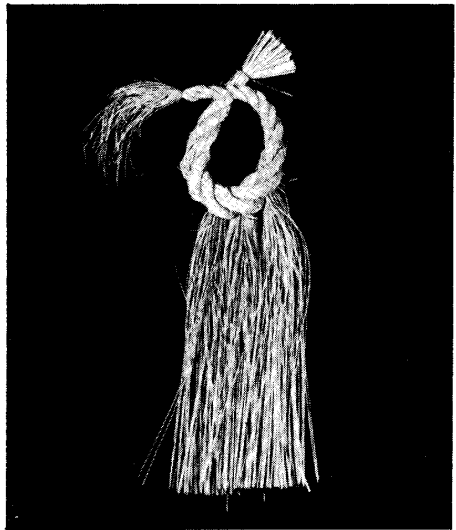


Fig 21-b

注連縄にみる伝承形態の調査研究(VI)

譲葉であり、輪ジメである。輪の結びの部分正面写真のため見えにくいだが、太さに変化のない一本の注連縄を約17cmほど輪にして上部で結ぶ。Fig 19-bのように絢尻を均等に蝶結びで左右に切りそろえて、円周の直径とほぼ同じ長さにカットしている。輪の中央部にシデの上部を3組で左右に編み固めて、3組編みの中心より上部を輪ジメの外へ扇形に平に配置する。さらに、3組編みの下部は、注連縄の円底部の3点に縋り込み、3条のシデとなって、輪ジメの下部へ約45cmの長さで長三角形でさげる。したがって、65cmのタテ長の注連縄となる。

Fig 20-aは富士市内で収集したものである。飾りは紅白の扇面中央部に寿の金文字を配し輪ジメの左右に日の丸の小旗、輪ジメ下部に譲葉、だいたい、裏白、紅白の御幣を2条さげる。

Fig 20-bはその基本形であるが輪ジメの円内に、3つの米俵を組み込む。シデのさげは輪ジメ下部に3点で編み込まれ、したがって3条のシデを下げる。タテ、約65cm、輪ジメの直径16cmであり、シデの長さは45cmとなり、これもタテ長のフォルムとシデが長い輪ジメである。

Fig 20-aは沼津市で収集した注連縄。この飾りは輪ジメとシデの交点に飾りの取り付けが集中している。飾りは扇面、日の丸、朝日の小旗、白紙で包まれた木炭を横一文字に飾る。さらに、譲葉、だいたい、裏白、紅白の御幣で飾られている。

Fig 21-bの基本形をみると、輪ジメの構造が一見できるが、絢尻がFig 20とは逆向である。シデの取り付け方は前者と同様であり、プロポーションもほぼ類似している。全長75cm輪ジメの直径はこれも17cm、シデは45cmの長さである。

静岡県浜松市、御前崎町系由、焼津市、静岡市、清水市、富士市、沼津市、熱海市とみても街中に注連縄を飾る民家は多いわけではなく、いずれも上記の注連縄の形態と基本的には類型的であり、フォルムの変化は認められなかったため、収集しなかった。

ちなみに、神奈川県小田原市もほぼ類似的伝承形態であった。

まとめ

中部地方は寒冷山岳地が多く、12月の調査は困難をきわめた。本稿は4年前から、岐阜県、長野県、愛知県、静岡県の4県をまわり、各県の民間に飾る風習をみると同時に、県単位で異種の造形をみた場合のみ収集した。したがって、各市町村で飾られているものを押し並べて記録したものではない。

各県1種でよいから、造形上の観点からみて、伝承形態に異種のものであればよいとした。注連縄の様相美の多様性は上記の調査の結果、予想以上に多くのものがみられ、まだまだ土地柄が変わると習慣も変わるように、注連縄の形態にも変化があることが確認された。

おわりに、今回はじめて、資料収集に当該関係機関の協力を得て寒冷地の調査がカバーできたので以下ここに記して感謝したい。

佐藤武郎 河野公記

資料提供および関係機関、関係者

長野県長野市立博物館・同館副館長山口純一先生

(同館は民俗資料の常設展示, 注連縄教室開講がなされて, 形態保存と技術伝承を行っている)

注連縄 5 種の提供をうけた。

岐阜県高山市商工観光部観光課, 観光担当係長渡辺隆蔵氏

岐阜県高山市千島町, 小林仁平氏

注連縄 1 種の提供をうけた。

注および参考文献

- (1) 「注連縄にみる伝承形態の調査研究」 1, 九州地方 5, 北陸地方
大分県立芸術短期大学紀要第15巻, 第21巻, 佐藤武郎, 河野公記。(1977)・(1983)
- (2) 「日本民族学全集 4」藤沢衛彦著, 高橋書院 (1959)
- (3) 「日本を知る事典」世界思想社編世界思想社 (1961)
- (4) 「ワラと生活」長野市立博物館編集, 発行 (1984)
- (5) 「日本史年表」三省堂編三省堂